小式部内侍の二話　宇治拾遺物語[1]

小式部内侍は和泉式部の娘。教科書では「大江山いくのの道の」の機転で有名（その相手は定頼だった）。母に劣らずモテモテだったようだ。これらは、相手の男三人をめぐる話。

三五　小式部内侍定頼卿の経にめでたる事［宇治拾遺物語巻三・三］

今は昔、小式部内侍に貞頼中納言物いひわたりけり。[2]それに又時の關白かよひ給けり。[3]局に入て臥給たりけるを、知らざりけるにや、中納言よりきてたたきけるを、[4]局の人「かく」とやいひたりけん、[5]沓をはきて行けるが、少しあゆみのきて、経を、はたと。[6]二声ばかりまでは、小式部内侍、きと耳をたつるやうにしければ、この入りて臥し給へる人、あやしとおぼしけるほどに、すかし声遠うなるやうにて、四声五声ばかりゆきもやらでよみたりけるとき、[A]「う」といひて、うしろざまにこそ、ふしかへりたれ。この入り臥し給へる人の、[B]「さばかりたへがたう、はづかしかりし事こそなかりしか」[7]と、のちにのたまひけるとかや。

八一　大二条殿に小式部内侍歌読みかけ奉る事［同巻五・十二］

これも今は昔、大二条殿、小式部内侍おぼしけるが、[8]絶え間がちになりけるころ、[9]例ならぬことおはしまして、久しうなりて、よろしくなり給ひて、[10]上東門院へ参らせ給ひたるに、小式部、台盤所にゐたりけるに、[11]出でさせ給ふとて、「死なんとせしは、など問はざりしぞ」と仰せられて過ぎ給ひける。[12]御直衣の裾を引きとどめつつ、申しけり。[13]

[C]死ぬばかり嘆きにこそは嘆きしか生きて問ふべき身にしあらねば[14]

堪へずおぼしけるにや、かき抱きて局へおはしまして、寝させ給ひにけり。[15]

問1　敬語の使われ方から主語を想定し、A、「う」と言って後ろ向きに臥し返った理由と、B、堪え難いと思った理由をそれぞれ説明せよ。

問2　C、歌を訳せ。下の句の下に何を補うと良いか。

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。駒沢大テキスト利用

2 ものいふ＝情をかわす。貞頼＝定頼。「大江山」の話では嫌味な男だったがその後つきあったのかよ。

3 それにまた、とは後から関白が通った。ということは貞頼と三角関係だな

4 直接訪問ということは、和歌贈答は既に経て関係ができているようだという平安常識。二人が鉢合わせしてしまうか、修羅場となるか。スリルだ

5 「かく」の内容がはっきり分からないが、多分、男が来てるとは言わない。

6 お経を読んだ。坊主に偽装したかな。

7 お経が、小式部内侍に通っている男のだとわかっていたんだろうな

8 おぼす＝尊敬語、大二条殿が小式部内侍をお思いになっていた。＝情を交わしていた。

9 絶え間がちになったということは、付き合っていたのです。夜の訪問が絶え間がちになった。

10 例ならぬ事のあと何が良くなったのかというと、続きから病気だったとわかる。

11 小式部内侍には敬語が使われてない。

12 絶え間がちなのに強気に出たな、しかも重病だと大げさにいったような

13 おお、出た。またもや裾を引っ張る、例の機転ですね。

14 嘆いていたんだよ。けなげさマックス

15 歌からセックス